

読んでみたい この一冊

大阪産業経済リサーチセンター
企業リサーチグループ 主任研究員

山本桂宏



●喜瀬雅則 著 小学館 1,512円(税込み)

タイトルを見て、何が書いてあるのか想像できるでしょうか。この本は、独立リーグのあるチームを紹介した書籍です。そして、タイトルにあるように、牛を購入し、売却することで収入を得たこともあります。

少し考えると、独立リーグは、野球をすることで収入を得るプロの集まりですから、どうして、こんなことをしているのか、という疑問が生じます。そして、その答えは、資金不足によるというものです。この原因は、そして、この球団はどうなっていくのかということ、この書を読み進めると、それが明らかになっていきます。

さて、評者は、中小企業診断士の資格を有しています。そのため、本書をビジネス書として論じていくことにしたいと思います。

この本を読むと、野球を通じて、地域発展を目指していることがわかります。つまり、今喧伝されている、地域活性化、地域にある経営資源を活用した事例書と解釈できます。具体的には、野球を通じて、高知県や四国を売り込み、外部から人などを呼び込み、地域社会や産業を活性化させていきます。例えば、経営することになったホテルを活用して、独立リーグのトライアウト（try out、希望者がチームに志願すること）時には、選手等がそこで宿泊することにより、人が集い、お金が落ちるようにしています。また、球団関係者が、野球とツーリズムというキーワードで外国に売り込みにまでいっている点は、そのバイタリティーに驚かされます。

このように、地域社会活性化の具体例とこの書を解するのであれば、「クラブはソフト、町がDVDプレイヤー」という一文がその結語です。自治体やその地域社会というハードがないとソフトは具体化できないし、地域資源というソフトがないと、ハードを活用する機会がないという上手い例えは、本書のエッセンスを凝縮しています。

次に、警告の書としても読むことができます。この本を読み進めると、地域活性化というもの

は、そんなに簡単ではないことがわかります。

球団の代表は、なるほど高知県の人です。ただ、実業家として活躍していたのは高知県ではありません。そのため、ぱっと見ると、故郷の球団のために働く美談です。しかしながら、そもそも、この球団の経営者が公募され、それに応じたというストーリーの始まりは、分配金や野球の興業だけでは運営資金が不足していたからです。よってオーナー自ら資金捻出のため、パンの売り子をして収入確保に奔走します。それだけでなく、オーナーの友人は、勤めていた会社を退職して球団経営に関与し、専らそれをする事になります。

このように、地域活性化は、絶対的に不足しているヒト、モノ、カネという経営資源を調達、もしくは捻出し、それが上手く機能する仕組みを講じないと成功しないと行間で訴えています。つまり、美談を支える努力や思いだけをクローズアップすることは、現実を正確に示さず、失敗を生む可能性を示唆しています。

評者は本書を書店のノンフィクションの棚で見つけました。そのため、大学の教員等によって記されたビジネス書ではなく、内容によっては、直接、ビジネスに活用できない部分もあります。

しかしながら、その部分を割り引いても、球団収支や高知県のデータ等、数値を用いて、球団の状況をしている説明している本書は説得力があります。ぜひ一読をお勧めします。

【著者略歴】

1967年2月8日、兵庫県生まれ。新聞記者。関西学院大経済学部を卒業し、1990年に産経新聞社入社。1994年からサンケイスポーツ運動部で野球担当となり、各球団担当を歴任。2008年に産経新聞運動部に異動し、プロ、独立リーグをメインとした野球担当を務めてきた。夕刊連載「独立リーグの現状 その明暗をさぐる」で2011年度ミズノスポーツライター賞優秀賞を受賞。